

1 ラオスの現状を知る

JICAラオス事務所、JETROビエンチャン事務所、日本大使館で経済社会概況や投資環境、開発課題やODA事業について学びました。内陸国のため“land locked country”(内陸国)と呼ばれたラオスは、今は“land linked country”(隣国とつながっている国)と言われ周辺国間の物流拠点として整備を進めています。



2 ラオス日本センターでの高度人材育成

ASEAN経済統合に備えビジネス人材育成プロジェクトを実施するラオス日本センターでは、世界9カ国にある日本センターで唯一MBAコースを設け、高度な実践的ビジネス指導を行っています。訪問時はMBA受講生との交流会が行われ、参加企業とのネットワーク構築が図られました。



3 現地日系企業の課題を知る

ラオスに進出している日系企業3社を視察しました。投資奨励分野における輸出入減免税などの優遇や安定的な電力などを理由に進出するも、輸送コストや離職対策などに悩まれている現状を知りまし。また如何に人材を確保しスキルを身に付けた従業員を定着させるかが課題であると実感しました。



4 青年海外協力隊の活動

ラオスでは現在52名の青年海外協力隊員が活動中とのこと。今回は2名の隊員の活動を視察しました。福井県出身の青山彩子隊員は看護師として、ラオス南部のセコン県病院で母子保健サービスの充実・強化に取り組んでいました。医療廃棄物が適切に処理されないなど厳しい施設環境の中、常に笑顔で同僚への看護技術指導を行っている姿に団員一同、感動しました。



5 JICA 中小企業海外展開支援事業を活用した海外進出の取り組み

ラオスで木造住宅普及を目指し、現地職業訓練校をパートナーにビジネス展開を目指す西野工務店(福井県若狭町)の活動を視察しました。JICA事業を通じて現地に導入したプレカット機材と試作品を見学し、またラオス人の技術者育成をいかに進めていくか、その取り組みを視察しました。

富山銀行営業統括部 ソリューション・サポート室 企画役補佐 泉 雄司さん

今回のラオス視察に際し、現地の経済・投資環境の動向や既進出日系企業の現地における経営環境・課題について理解を深める事を目的に参加しました。投資環境としては、部材の供給体制や高い輸送コストなど物流面における課題を抱えているものの、安価な労働力と安定した電力供給は大きな魅力と感じました。

福井シード株式会社 代表取締役 社長 井村 裕治さん

点在する集落と周りに広がる農地や森林、ラオスがラオスである所以だと思いがながら飛行機から眼下の景色に見とれていました。初日は、JICAラオス事務所、JETROビエンチャン事務所、日本大使館、ラオス日本センターを訪問し、翌日からは、進出されている日系企業や、青年海外協力隊員の活動先を訪ねました。セコンでは同郷の女性ボランティアや、バクセでの進出企業の活躍には胸が熱くなりました。メコンの夕日に送られながら、再訪を誓い、帰国後のラオスでの取り組みに思いを馳せていました。

有限会社田中土建 海外事業部 田中 麻衣子さん

『幸せて何でしょうかね。』訪問先の経営者の方の言葉が印象に残っています。アジアの最貧国と言われながら、ラオスには不思議な豊かさが漂っていました。人々は“今この暮らし”に満足しているようです。日本にはない豊かさがラオスにはあります。広く深くラオスについて知り、大切なことに気づけた今回の視察。貴重な体験をさせて頂きました。

視察後の感想



青年海外協力隊50周年記念 特集第2弾!

元青年海外協力隊員で、帰国後、能登に移住された

中谷なほさんにインタビュー!!

(2006年~2008年迄、ジンバブエで料理隊員として活躍)

Q1 何がきっかけで、青年海外協力隊に参加しようと思ったのですか?

A1 叔母が青年海外協力隊OBだったこと、親しい友だちが参加を決めたことで協力隊に興味を持ちました。途上国で暮らしてみたいというのが正直な参加の理由です。

Q2 協力隊に行く前は、何をされていたか?

A2 沖縄のホテルの調理場で働いていました。

Q3 協力隊では、どのような活動をされていたか?

A3 任地では観光・ホテル専門学校の製菓製パン、料理コースの講師として活動しました。

Q4 帰国後、どんな思いがあって能登に移住をしようと思ったのですか?

A4 日本の田舎で暮らしたかった。以前住んでいた、石垣島のような観光地ではないところに。能登には、金沢大学の講座(里山里海マイスター養成講座)を受講するために移住しました。特に能登という地域を選んで来たわけではありませんが、ひと・コミュニティー・食文化も知るほどに面白いところで、6年目にしてカルチャーショックはまだ続いています。

Q5 現在は、どのようなことをされていますか?

A5 <小さなうち>という名前で自営業(週に3日の食堂、焼菓子の製造販売、イベントでの飲食出店、食べものワークショップの開催などを行っています)。ほかに、ドキュメンタリー映画を観て話す会<わかちあい劇場>(月に1回の定例会、自主上映会の開催は年に1回程度)を主催。<珠洲の一箱古本市>(古本のフリーマーケットのようなイベント、本と人、人と人との出会いの場)を年に3、4回開催しています。

🏠 小さなうち

石川県珠洲市飯田町13-29-1 電話:0768-82-0151
e-mail:chiisanaouchisuzu@gmail.com
食堂の営業は木・金・土曜日 11:30~夕方

養われたのは、コミュニケーション能力と生きる力



青年海外協力隊員時代の中谷さん

Q6 能登に移住されてから、何か大変だったことはありますか?

A6 様々な世代や考え方の違う人とコミュニケーションをとることの面白さ、大切さに気付いたのは協力隊時代でした。また、必然的に養われたコミュニケーション能力は、今、役に立っていると思います。もうひとつ協力隊活動を通して身に付いたことは、何かほしい物が手に入らないなら自分でつくろう、手に入る環境をつくらう、という考え方と行動力です。

Q7 今後は、どのような夢がありますか?

A7 地域の様々な人が集まり、身の回りの関心事について話しができる機会が増えたらいいですね。そのひとつとして(わかちあい劇場)のドキュメンタリー映画自主上映の回数を増やす方法を検討中。考えを行動に移す積極的な若い世代の人たちが増えたら、能登はもっと面白くなると思います。



現在の中谷さん(右端)



「福井から世界へ! 青年海外協力隊297人の汗と涙そして笑顔」

6月6日、福井県国際交流会館において、青年海外協力隊50周年記念イベント「福井から世界へ! 青年海外協力隊297人の汗と涙そして笑顔」を開催しました! 当日は西川一誠福井県知事にもご臨席賜り、祝辞もいただいた他、160人を超える方々にお越しいただき、大盛況となりました。青年海外協力隊事務局の小川登志夫事務局長からは「協力隊50年の成果と課題」と題して講演してもらった他、福井出身の帰国ボランティア2名の活動報告と、映画「世界の果ての通学路」(監督:パスカル・ブリッソン氏)の上映などを行いました。参加者からは、「活動報告では、実際の様子が良く伝わってきた」「自分たちの生活を振り返るいい機会だった」「自分もいつか参加してみたい」などの感想が寄せられ、まさに青年海外協力隊のこれまでの「汗と涙そして笑顔」が伝わる一日となったようです。

